

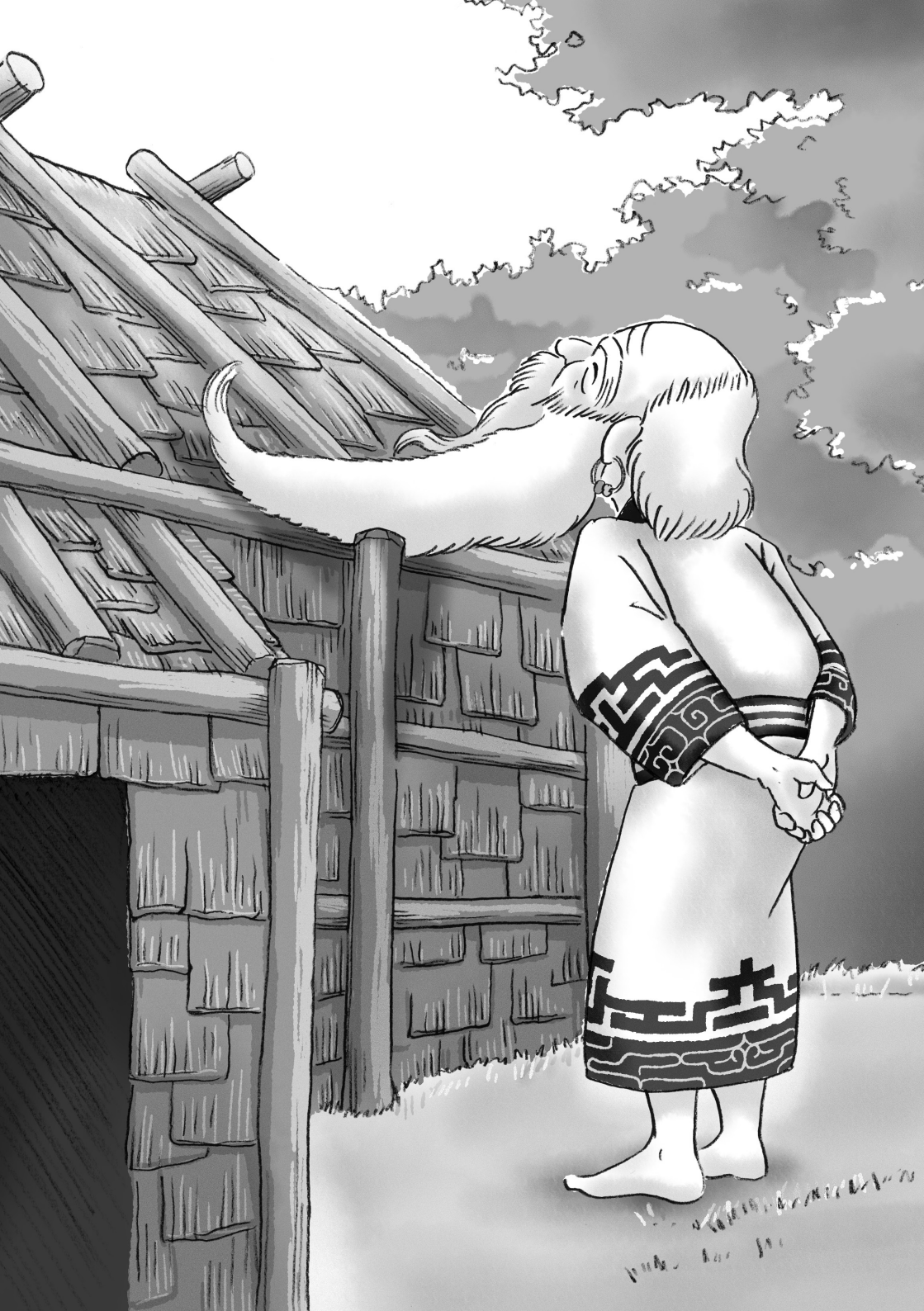
村^{むら}を守^{まも}つた夢^{ゆめ}のお告^つげ

——おとうさんが話^{はな}してくれ^た昔話^{むかしばなし}



これは、わたしがまだ小さかったとき、
わたしのおとうさんから聞いた昔話。
ほんとうのことかどうかさえ、わたしには、わからないけれど、
おとうさんが、そうしてくれたように、わたしも、おまえに話してやろう。

むかしむかしのこと、オヤンルルというコタンに、
ヤイレスーポという男が住んでいた。
ヤイレスーポには、チリキアंकフという、
おじいさんの姿の守り神がいた。
チリキアंकフは、木のしげった山が、すきですきでたまらず、そこに住んでいらした。
そして、カバの木とハンの木とニワトコの木で、たましいを入れた人形を作り、
家の守り神にして、家のうしろに立てていた。
それから、金の鳥を作り、銀の鳥を作った。
金の鳥は、家の上手の軒におき、
銀の鳥は、家の下手の軒においていたんだそうだ。



チリキアंकフは、なんとも長いあごの持ち主だった。だから、いつも家の軒にあごをのつけて、ひとやすみ。

ある日、軒にあごをのつけたまま、

うららかな日差しに、つい、うとうとしていると、

チリキアंकフは、夢を見た。

それは、こんな夢だった。

「おい、チリキアंकフよ。

これから、わたしがいうことを、

よおくおぼえておくがいい。

いずれ、海の向こうから、化け物の船がやってくる。

トウイマオヤンルルという遠いコタンから、くる船だ。

あいつらを、けつして、甘くみるでないぞ。

コタンをおそう、おそろしい船なのだ。

くれぐれも、気をつけるのだぞ」

夢を見させたのは、チリキアंकフを、

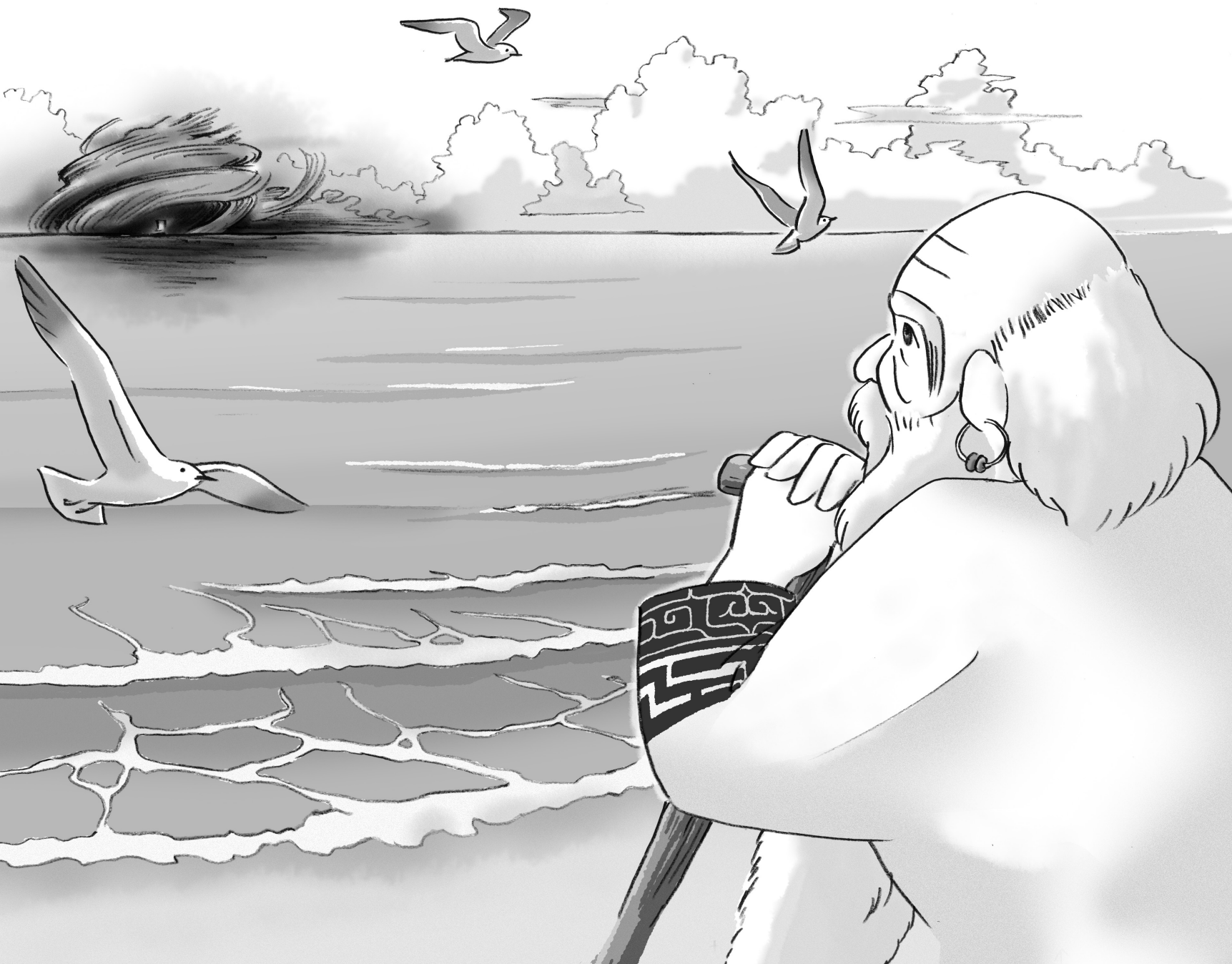
さらに見守る、守り神。



チリキアंकフは、はつと目を覚まし、
軒からあごをおろして、家のなかへと入っていった。
たばこに火をつけ、ふうつと煙をはきながら、
囲炉裏の灰を手前によせたり、火の方へおしもどしたり、
しばらく考えこんでいると、いきなり、ひびく鳥の
屋根の上の金の鳥と銀の鳥とが、
さわがしく鳴きあっているのだった。



そんなことがあったある日、チリキアंकフは、すつくと立ちあがり、
海うみのようすを見るため、
杖つえを手に、浜はまへと、おりていった。
大きおおくまたいだり、
小さちいくまたいだり。
枯かれ木きは、ぼちぼち折おれて落おち、
生なま木きは、ひゅんひゅん揺ゆれて跳はね、
チリキアंकフは、浜はまについたんだ。



チリキアंकフは、杖によりかかり、じつと海をながめてた。
すると、水平線のかなたから、まつ赤な血の霧が、
おそろしい竜巻となつて、みるみる、こちらにやってくるではないか。
よくよく見れば、それは化け物の船。
コタンをおそう、おそろしい船だった。
その船が、いま、まさに、こちらにやっこようとしているのだ。
チリキアंकフは、すぐに家へもどつていった。

チリキアंकフが、あごを軒のきにのせると、
金の鳥きんとりと銀の鳥ぎんとりが、さわがしく鳴ないた。
そこで、チリキアंकフは、
自分じぶんが守まもっているヤイレスーポに、
夢ゆめを見させることにした。

「ヤイレスーポよ。

これから、わたしがいうことを、

よおくおぼえておくがいい。

あした、海うみの向むこうから、

化け物ばけものの船ふねがやってくる。

トウイマオヤンルルという遠とほいコタンから、くる船ふねだ。

あいつらを、けっして、甘あまくみるでないぞ。

コタンをおそう、おそろしい船ふねなのだ。

くれぐれも、気きをつけるんだぞ。

どうすれば、コタンを守まもることができるのか、

わたしにも、まだわからない。

わかったら、また夢ゆめで教おしえてやろう」





その夜、ヤイレスーポは、また夢を見た。
あのチリキアックフの夢だ。

「ヤイレスーポよ。

化け物の船から、コタンを守るには、こうしたらいい。

まず、ニワトコの木の人形と、ハンの木の人形と、カバの木の人形を作りなさい。

それを、道にならべて立てながら、浜までおりていきなさい。

浜についたら、こんどはその向かいに立てながら、もどつてきなさい。

子犬の頭の骨は、どんな悪いものがきても、

ほえて追い返してくれるのだから、これも、きれいに並べておきなさい。

そうすれば、そのものたちが、化け物を追いはらつてくれるだろう」

つぎの朝、ヤイレスーポは、まだ夜の明けきらぬうちに目を覚まし、

死にもぐるいで、ニワトコの木とハンの木とカバの木をけずつて、

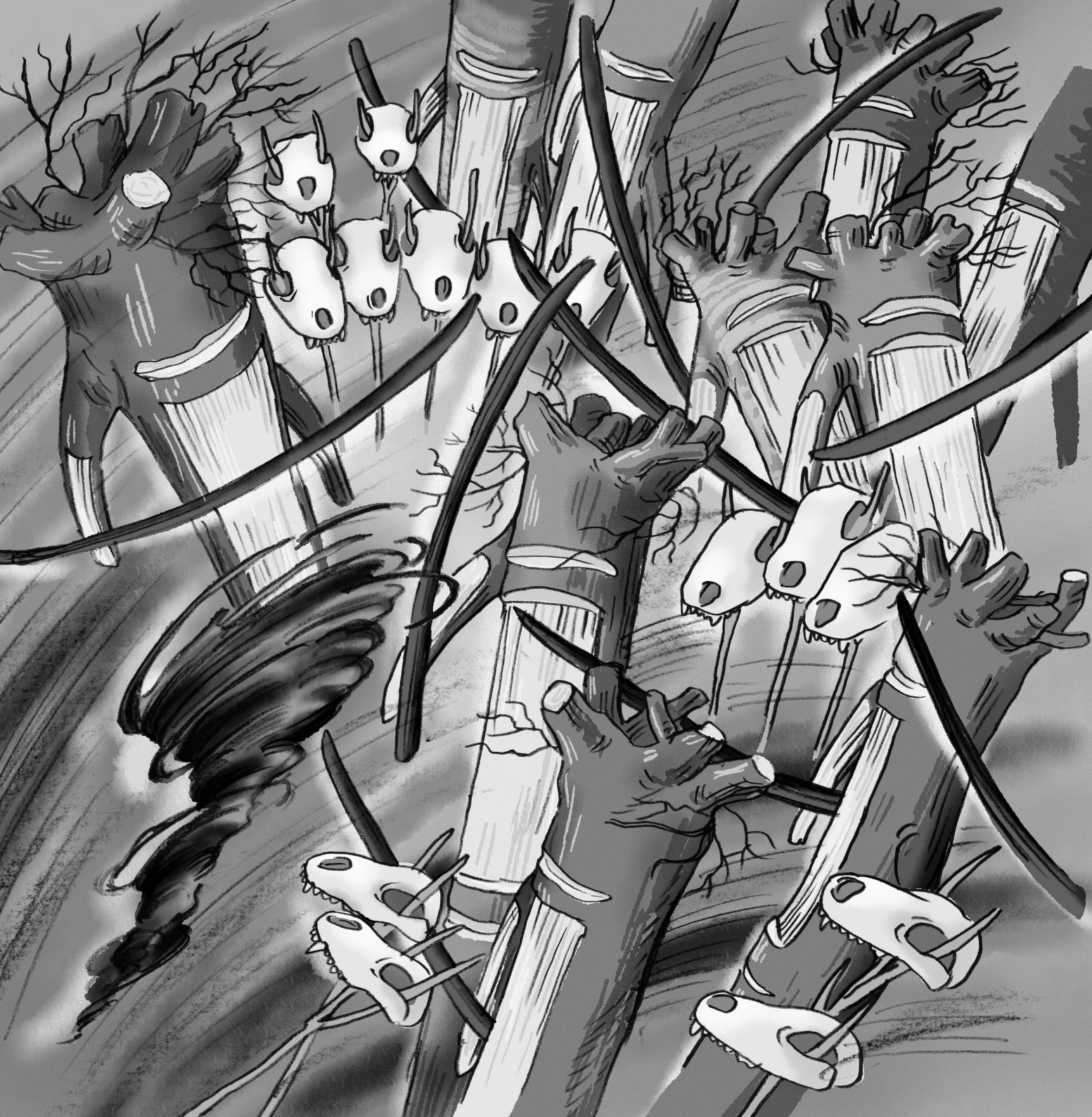
たくさんの人形を作った。

人形には、みな、木の刀を持たせた。

そして、チリキアックフにいわれたとおり、

浜へと通じる道の両側に、木の人形を並べて歩いた。

それから、子犬たちの頭の骨を、人形のそばに並べた。



ヤイレスーポが家のなかで、じつと息をひそめていると、やがて、化け物の船が、浜についた物音がした。たくさん人の声が出て、それが、だんだん近づいてくる。がやがやというざわめきが、浜からの道をのぼってくる。すると、いきなり、ものすごい足音が、ひびいた。あの木の人形たちが、いつせいに足を踏みならしたのだ。刀をぶんぶん振りまわす音、はげしい声もひびいてくる。ワンワンとさわがしいほどの、犬のほえる声もきこえてきた。そのようすをみた化け物は、みな船に乗り、とうとう、しっぽを巻いて、にげかえっていった。

このようにして、
ヤイレスーポの守り神である
チリキアंकフが、
金の鳥と銀の鳥を家の軒におき、
家のうしろには、ニワトコの木の人形と
ハンの木の人形と
カバの木の人形をおいて、
家を守らせていたおかげで、
ヤイレスーポは救われたのだ。

そんな昔話もあるんだよ。

